

先生の学校 オンラインミーティング 事例発表

学習に取り組んでいる様子が伝わるように、生徒・関係者の写真が多数入っております。二次利用の無いようにご配慮願います。

茨城大学教育学部附属中学校
主幹教諭 小林 伸彦

「先生の学校」 オンラインミーティング

主な発表内容

- 本校の研究
- グローバル市民科の実践
- まとめ

※伝えたいことはたくさんありますが、15分で終了します。駆足で進めることをご容赦願います。何かございましたらご質問ください。

学校紹介

学校名：茨城大学教育学部附属中学校

所在地：茨城県水戸市文京1-3-32
水戸駅からバスで20分

学級数：36名×12学級（1学年4学級）

生徒構成：1学年概ね90名程度，附属
小より連絡入学
定員144名に対し，公私立
小学校より選考試験

研究：毎年1回授業研究会を実施し，
研究成果を広く発信

発表者：小林伸彦（本校13年目）
研究主任（H30），主幹教諭（R1
～現在）
文部科学大臣優秀教職員受賞（H31.5）

本校の研究主題

「社会を創る自立した生徒の育成」

～他者との対話を通じた深い学びを通して(1年次)～

～授業づくりの実践及び教育課程の工夫・改善を通して(2年次)～

～各教科等を通して育む資質・能力相関図の活用を通して(3年次)～

※複数の人と構成する空間の総称(本校定義)

〈めざす生徒の姿〉

- 問いを見いだし、解決に向けて粘り強く考えたり、学んだことを活用したりし、内省(自己探究・自己更新)する生徒
- 社会と自分との関係を考え、主体的な態度で社会の形成に参画・貢献しようとする生徒

目指す生徒の姿の実現に向けて

学校の教育活動全体, 家庭, 実社会における「人・もの・事象」との関わり



多様な価値観を有する他者との協働的な学び

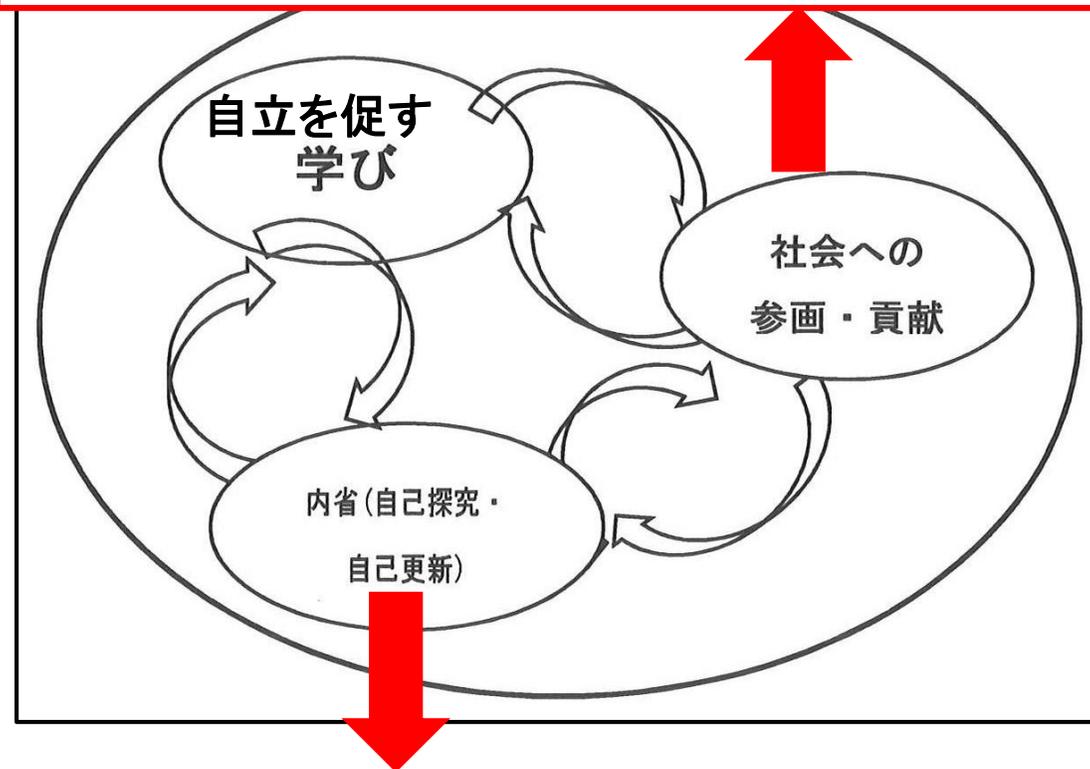
- ・ 実感
- ・ 受容
- ・ 折り合い
- ・ 新たなより価値のある考えの創出



自分自身の在り方や生き方についての問い直しと更新

参画・貢献

：空間を互恵的でよりよいものにするために考えを述べたり，行動したりしていくこと



内省(自己探究・自己更新)

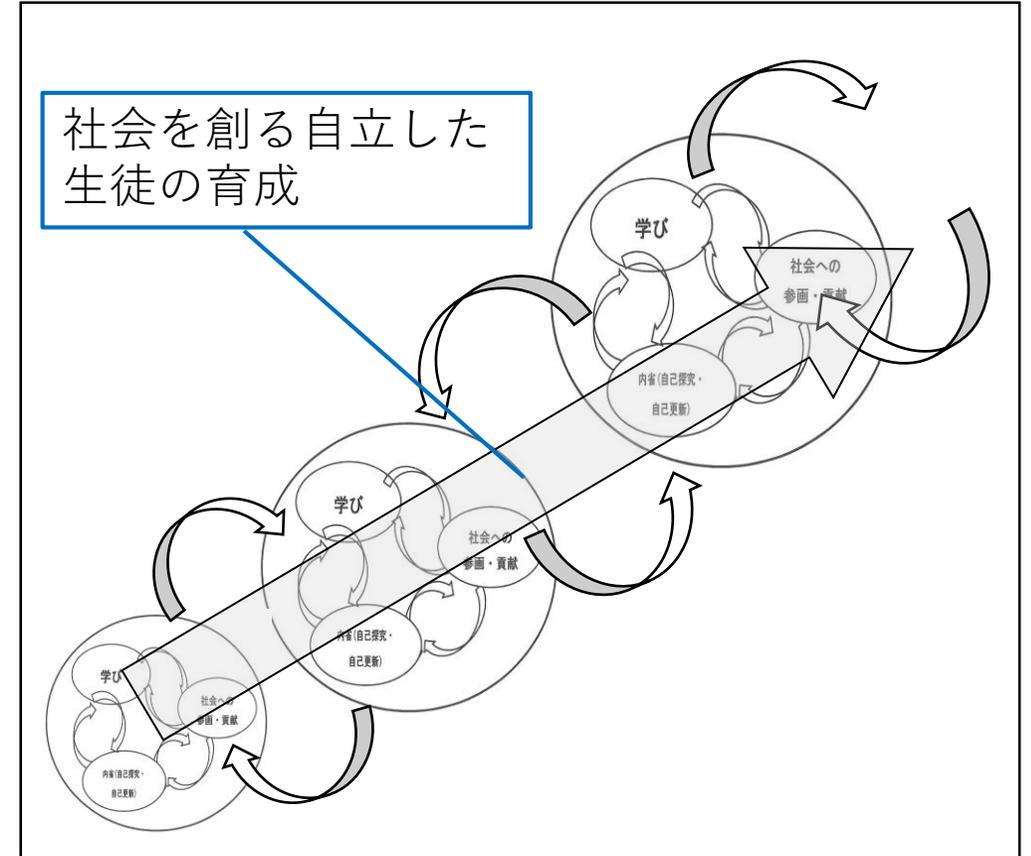
：自分について探究し，更新していくこと

目指す生徒の姿

学びながら、
学んだことを活用しながら、
社会と自分との関係を考える
（再認識）

内省（自己探究・自己更新）

主体的な態度で社会の形成
に参画・貢献していく生徒



研究構想図①

研究の手立て

I 一人一人の自立を促す学び

- (1) 系統性や他教科との関連性, 単元(題材)のまとまりを重視した学びのデザイン
- (2) 学びのプロセスの設定と内発的意欲を喚起する工夫
- (3) 思いや考えを深め合うコミュニケーションの工夫

II 社会への参画・貢献を促す学び

- (1) 人的・物的学習環境の整備
- (2) 経験を育む体験及び活動の重視と学びの成果の可視化

III 内省(自己探究・自己更新)を促す学び

- (1) 自己肯定感を育む支援体制の整備
- (2) 自分の「よさ」や「らしさ」を見つめるメタ学習

グローバル市民科(総合的な学習の時間)

縦割り交流班による全校総合 「しあわせ社会の実現」学びの軌跡

平成29年度「しあわせ社会の実現～決めること～」
平成30年度「しあわせ社会の実現～働きかけること～」
平成31(令和元)年度「しあわせ社会の実現～創ること～」

□平成30年度～平成31(令和元)年度
文部科学省「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム」指定

※本校, 滝本穰治教諭とともに実践

グローバル市民科における実践/ 平成29年～令和元年度

研究主題

持続可能な社会を創る資質・
能力を培うー実践

ー全校生徒・全職員で取り組む総合的な学習の時間(グローバル市民科)「しあわせ社会の実現～創ること～」における実践社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムの工夫・改善を通してー





1 研究主題

持続可能な社会を創る資質・能力を培う—実践—
—全校生徒・全職員で取り組むグローバル市民科
(総合的な学習の時間)「しあわせ社会の実現～創
ること～」における実社会との接点を重視した課
題解決型学習プログラムの工夫・改善を通して—

2 研究のねらい

全校生徒・全職員で取り組む総合的な学習の時間(グローバル市民科)「しあわせ社会の実現～創ること～」における実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムの工夫・改善を通して、持続可能な社会を創る資質・能力を培う。

3 研究の仮説

全校生徒・全職員で取り組む総合的な学習の時間(グローバル市民科)「しあわせ社会の実現～創ること～」における実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムの工夫・改善を行えば、持続可能な社会を創る資質・能力を培うことができるだろう。

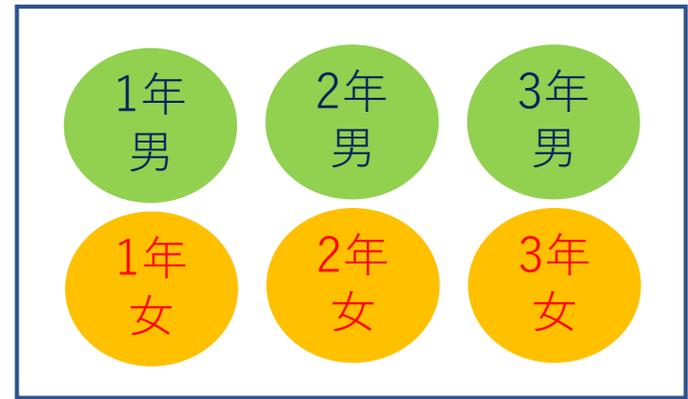
4 研究の手立て

持続可能な社会を創る資質・能力を培うために、全校生徒・全職員で取り組む総合的な学習の時間(グローバル市民科)「しあわせ社会の実現～創ること～」における実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムを工夫・改善する。

全校総合とは

□本校概要

- ・各学年4学級(計12学級)
- ・1学級36または40名で編制(現在は全て36名)
- ・基本的に男女の人数は半分ずつ(18または20名)



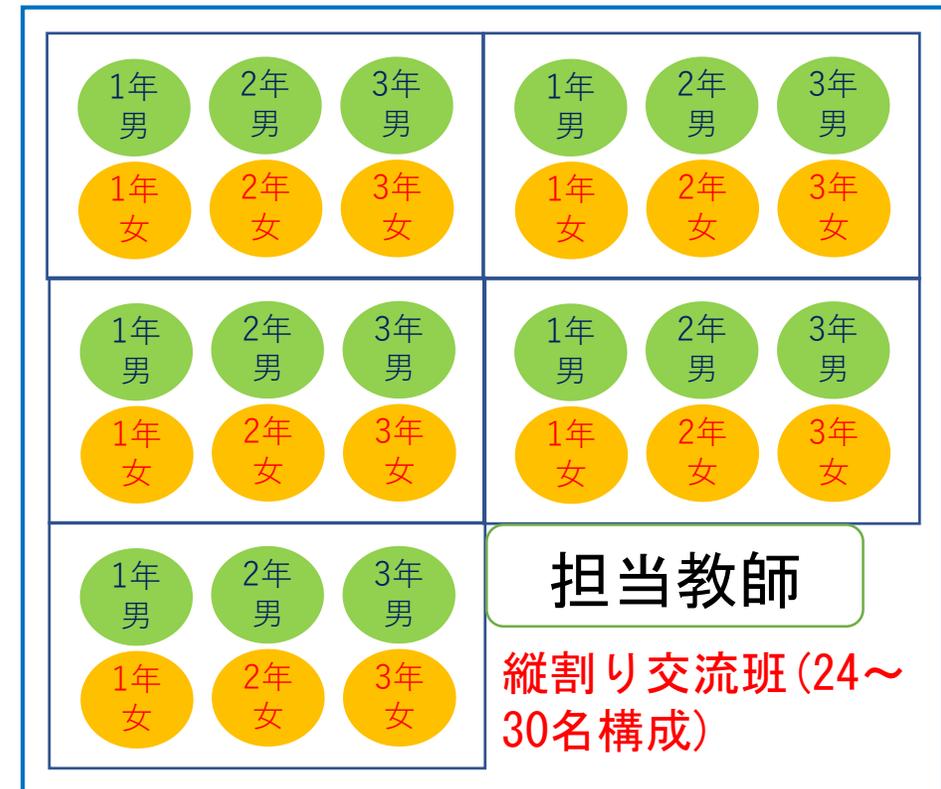
グループ(基本6人構成)

□縦割り交流班

- ・**グループ**:各学年男1名, 女1名の計6人(基本)で構成する班を編成
- ・4~5班(24~30名)で構成
- ・縦割り交流班に対し, 一人の教師が担当

□全校総合

- ・全17縦割り交流班が校内の教室や特別教室に分かれて活動



4 基本的な考え方

(1) 「持続可能な社会を創る資質・能力」とは

□グローバルな視点で身近な地域で起きている問題に関心を持ち、その解決に向けて身に付けたことを活用しながら主体的に判断したり、今後も責任をもって関わったりしていこうとする力。

□周りの人や社会、自然などとの関係を考え、「関わり」や「つながり」が大切であることを理解し、よりよい社会創りを尊重していこうとする力。

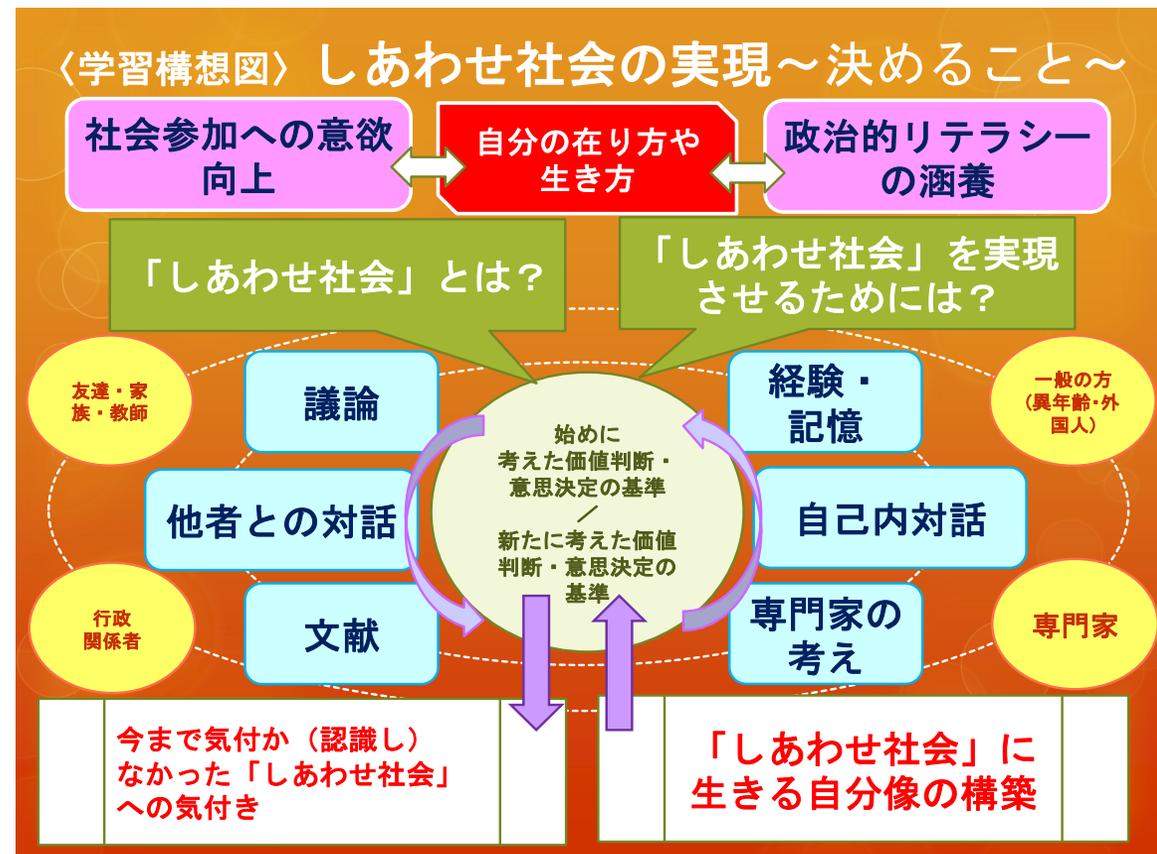
(2) 「しあわせ社会の実現～決めること～」(平成29年度)

■ねらい

- 社会参加(当時)の態度の育成
- 政治的リテラシーの涵養

■工夫したこと

- 家族や一般の方、行政機関など、社会を構成する多様な他者と対話したり議論したりする場を意図的に設定
- 生徒を取り巻く社会に生きる人々の多様な生の声(専門家、行政関係者、家族、友達、異年齢の日本人、外国の方など)を直接聞かせていくことで、自分と社会を関連付けながら「しあわせ社会」と向き合うことができるようにしていった。
- 生徒は、自分や身近な地域で起きている問題や課題に対し、主体的に社会と関わっていく責任や義務、使命に対する認識を深めながら、そこに生きる自分の在り方や生き方について内省(自己探究・自己更新)し、「しあわせ社会」に生きる自分像を構築していった。



学習構想図(平成29年度作成)

4 基本的な考え方

(2) 「しあわせ社会の実現～決めること～（平成29年度）」を实践

■成果

○誰もがしあわせに生活を送ることができる社会の実現を目指し、様々な他者、情報などに関わりながら方策をまとめることができた。

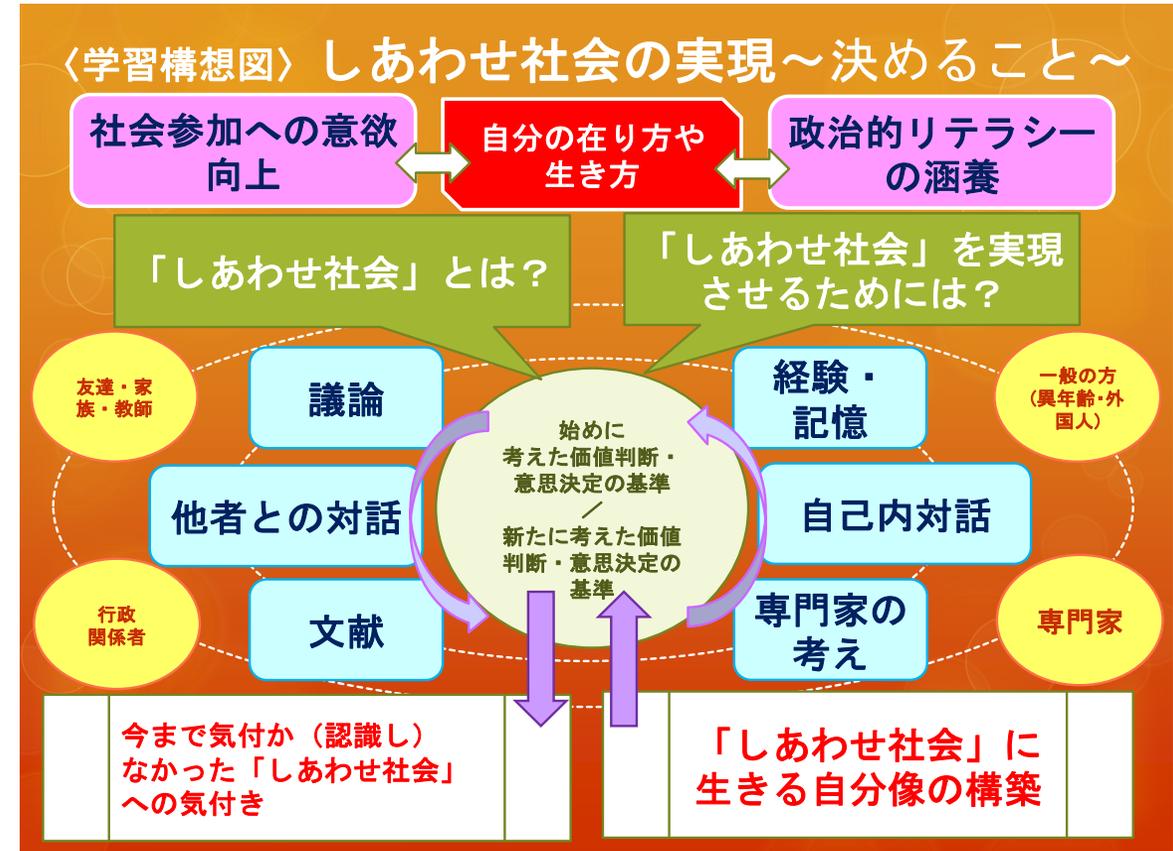
○生徒同士でベストプレゼングループを選出し、その代表生徒は県知事や衆議院議員を前にして、熟考した方策や提言を堂々とプレゼンすることができた。

○生徒の振り返りを分析すると、少子高齢化などの身近な社会問題に関心を抱き、自分の経験と知識を照らし合わせながら、どのようにそれらの問題と向き合っていくかという、持続可能な社会を創る資質・能力の育成に効果が見られた。

■課題

●対話を通してグループが定義付けた「しあわせ社会」像に対して現状を調査して提言をまとめるところまでは進んだが、時間(時数)の関係で働きかけ—実践・行動—までは至らなかった。

●学びと社会とをつなげ、自分の在り方や生き方について考えを深めることで、生徒は学ぶ意義を実感し、社会に参画・貢献できるように自分をさらに成長させていくと考えた。



学習構想図(平成29年度作成)

(3)「しあわせ社会の実現～働きかけること～」 平成30年度

■成果①

○「しあわせ社会」を定義付けるためや、自分たちが働きかけようとしていることが実社会において妥当性のあるものかを検討するために、多様性が進む社会と生徒との接点を生み出しながら学びを深めることができた。

持続可能な社会を構築していくための資質・能力を培う上で有効だった。

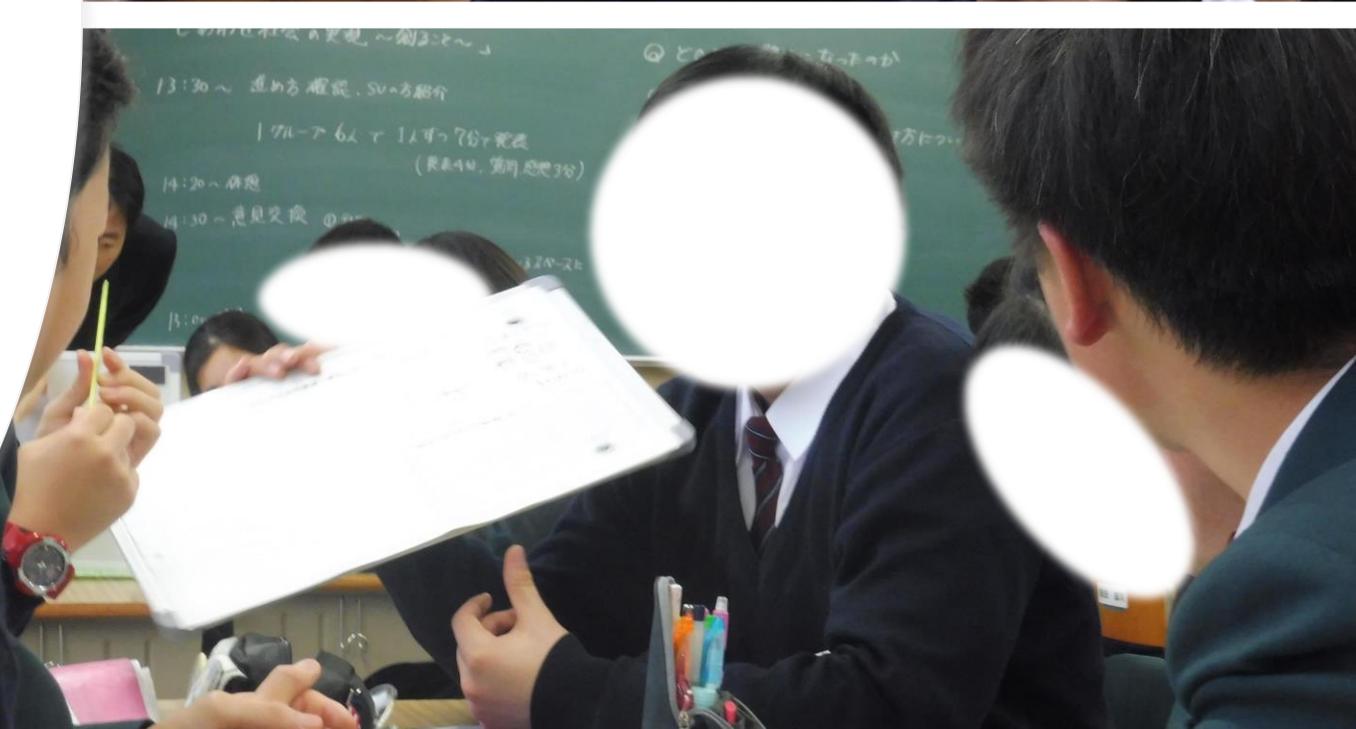


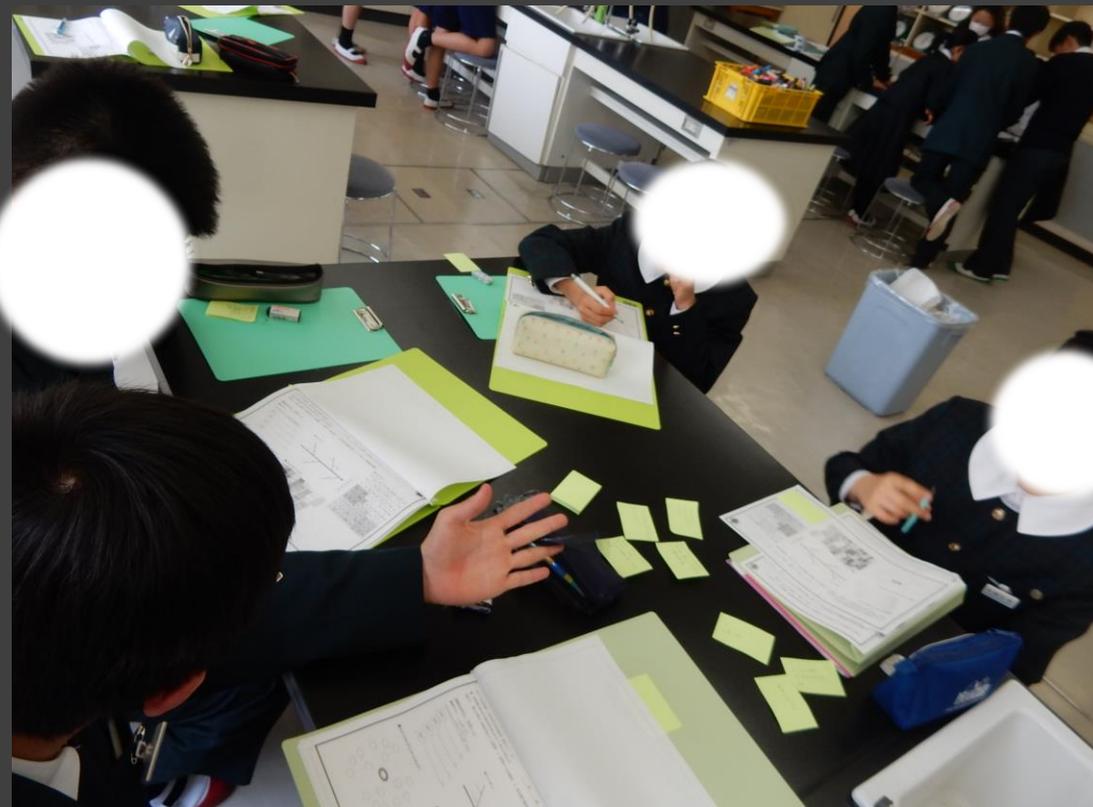
(3) 「しあわせ社会の実現～働きかけること～」
平成30年度

■成果②

○グローバル市民科(総合的な学習の時間)の全体構想として、学年講座(横の連携)や異学年交流(縦の連携)という視点から、「しあわせ社会」を定義付けるため、哲学的に抽象的な概念を構築(平成28年度第3学年「哲学すること」、平成30年度第2学年「『問い』をもつ」において実践)し、少しずつ思考を深めていく一連の活動は、大変意義深い本校ならではの学びとなってきた。

○縦割り交流班を活用しながら全校生徒で取り組んでいることについても、多様性を重視した学び合いの視点から、今後も研究と実践を継続していくべきと捉えた。





(3) 「しあわせ社会の実現～働きかけること～」平成30年度

■課題

- 実社会に生きる外部人材を積極的に活用し、対話する場をもっと多く設けることで、共に学びを創り上げる講座にしていくのが理想であることや、生徒が実社会に赴くことは何度もあったが、深く関わり続ける人的な交流を図れるようにすること。
- 学校と実社会との接点を一層生み出していく工夫をする。例えば、実社会で生活されている方々に授業に参加していただき生徒の学びを支えていただくような工夫をすることで、生徒は「学び」、「実社会」、「自分」を関連付けながら講座を進めていけるようになるのではないかと。

(4) 「しあわせ社会の実現～働きかけること～」 令和元年度(3年次)

- 学校内外の人的資源を日常の授業に招き入れながら生徒の学びをサポートしていただく**人的環境を整備**
- ネットワークを構築しながら「社会とともに社会を創る」学びの構築
- 本講座で目指すものは、よりよい未来の実現に向けて働きかけていく持続可能な社会を創る資質・能力を育むこと
- 身の回りの社会に問いを見いだし、見つめ直すとともに、公共の福祉を具現化するための手立てを検討し、**生徒一人一人が一主権者として社会に参画・貢献していく自分の在り方や生き方について考えられるようにする。**

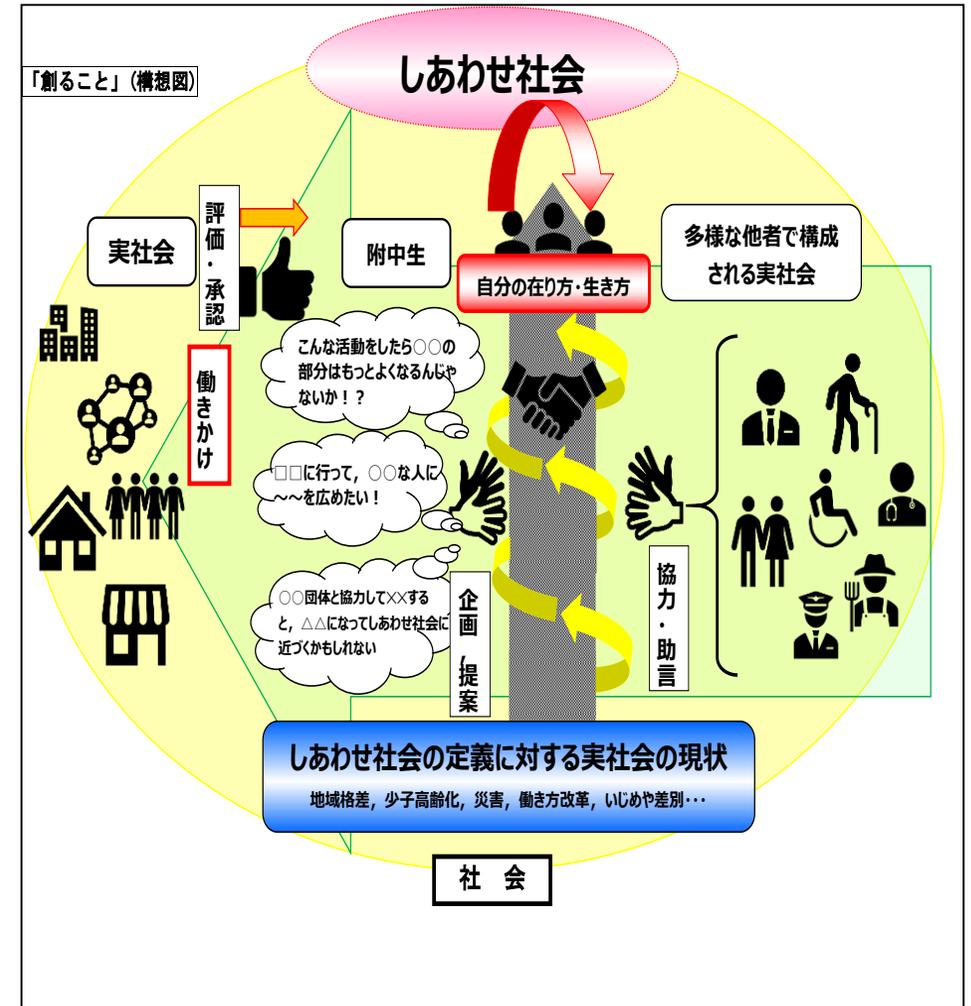


図2 学習構想図②

(4) 「しあわせ社会の実現～働きかけること～」 令和元年度(3年次)

- 生徒が実社会と学校との接点を重視し、**実社会と学校とを往還しながら学びが深まる**ように取組を工夫・改善していく
- 生徒は学びを振り返るとともに、しあわせな社会を創るためにどのように社会に参画・貢献していくべきか、**自分の在り方や生き方について内省(自己探究・自己更新)**していきけるようにする。

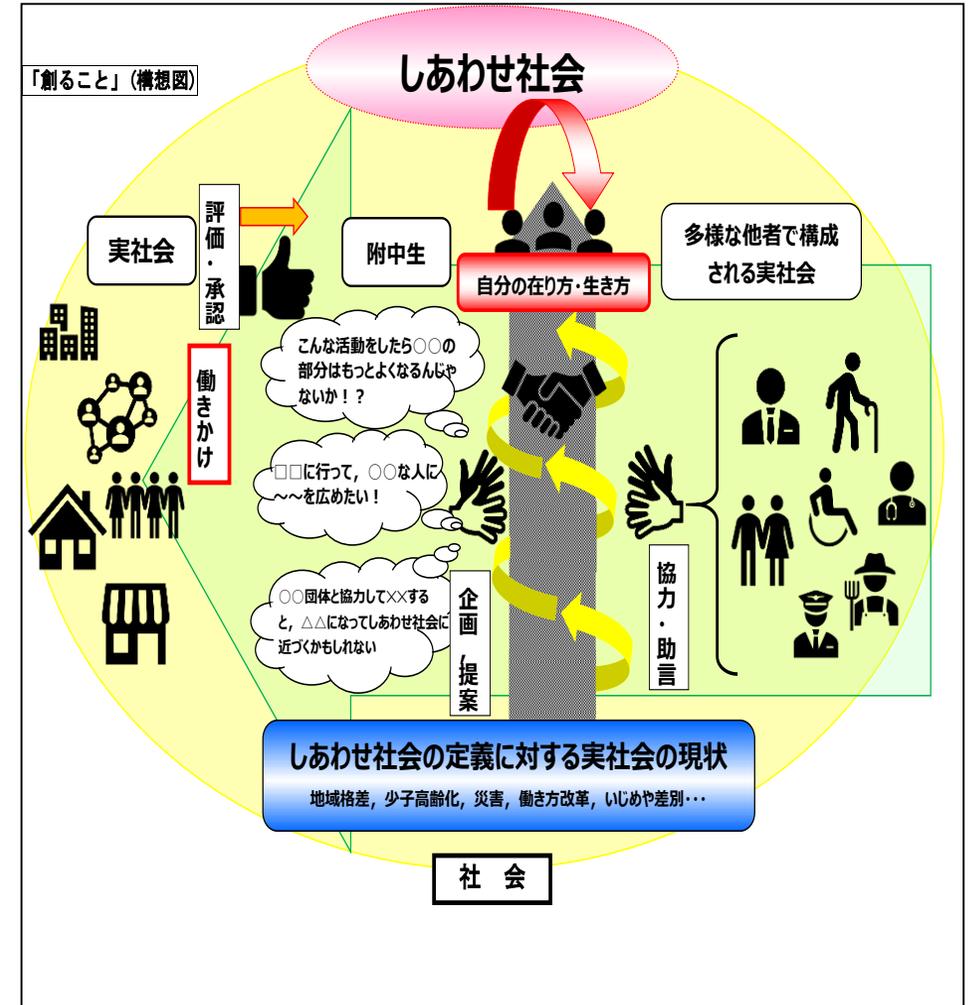


図2 学習構想図②



(5) 「附中スクールボランティア制度(以下「附中SV制度」)とは①

□本校では、「社会」を「人と人が構築する空間の総称」、「地域」を「生徒の身の回りのコミュニティ」と定義付けている。人が複数集まれば、その空間をよりよくするための「社会」が創られ、生徒が遠く離れた県外で体験活動を行えば、その空間も生徒にとっては大切な「地域」と考えている。

□本校は、平成10年に「附中SV制度」を発足し、地域人材を積極的に活用しながら生徒の学びを支えるシステム構築に当たってきた。



(5) 「附中スクールボランティア制度（以下「附中SV制度」）とは②

□大きな特徴は、週に一度スクールボランティアコーディネーター（以下「SVC」）が来校し、教員と実社会とをつなぐサポートを行っていていること

□年度はじめの保護者会において制度設立の経緯や活動の趣旨を説明し、登録者募集を依頼している。年間を通して随時登録を受け付けている。

□平成30年度は制度創設20年目に当たり、SVCが主体となって保護者対象に説明会を行うなど、意欲的に活動していただいた。（今年度23年目）

(6) 「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム」の工夫・改善とは

平成29年度の全校講座「しあわせ社会の実現～決めること～」の発端

多様な価値観を有する他者と誰もがしあわせな社会を創るには、どのような価値判断や意思決定を行っていくべきかについて、一人一人が探究(哲学)していくことにあった。その根底にあったのは、(中略)本校生徒の実態として、少数ではあるが他者との関係を遮断することがあったり、他者と交流することを拒み特定の間人間関係のもと生活したりする様子が見られ、危惧した背景がある。

学年の枠を越えて、多様な価値観を有する他者ととともに協働的に学び合うとともに、「共生」について改めて深く考えさせていきたいと構想したことが発端



佐藤郡衛, 佐藤裕之(2006), J. デューイ(1969), 論点整理(2015), 佐伯(1995)

多様性が進む社会を学校内にも創出させながら協働的に学びを深めていきたいと考え、全校生徒で構成した縦割り交流班を基本単位として構想することにした。また、学校と実社会とを円滑につなぐため、本校の教育システムの特色である「附中SV制度」を活用していくことにし、生徒が実社会に出かけて主体的に学んだり、実社会に生きる人材を学校に招いたりすることで、実社会を学校に取り込みながら学びを深めていけるように工夫していく。学校内外における人的環境を有効に活用しながら、他者に対して根拠とともに自分の考えを明確に説明したり、対話や議論を通じて相手の考えを理解したり自分の考え方を広げたりしていく中で、協働的に持続可能な社会を創る資質・能力を培っていくことにした。



5 研究の概要

□講座の主な活動

(16時間取扱い／5～12月実施)

(1) 問題提起・課題設定【全校生徒】

フィールドワーク①

「しあわせ社会」とは、どんな社会か

(2) 「しあわせ社会」の定義付け【縦交班】

(3) 課題設定【縦交班】

フィールドワーク②

定義付けた「しあわせ社会」に対し、実社会の現状はどうなっているか

(4) 調査報告・「社会を創る」ためにできることの視点の焦点化【縦交班】

(5) 計画・準備【縦交班】

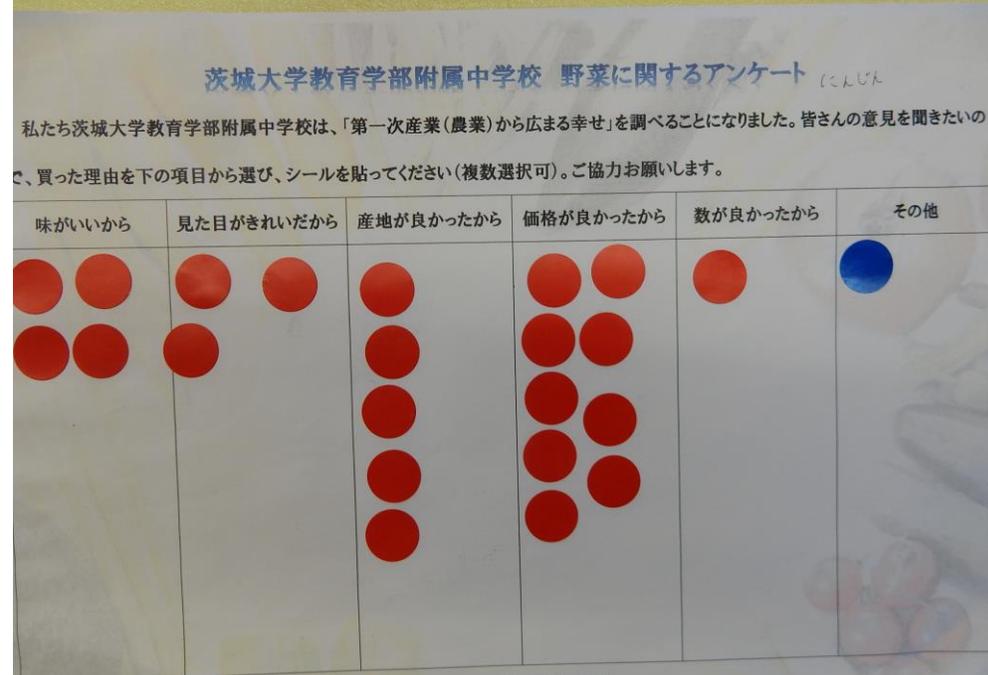
(6) 働きかけ【縦交班】

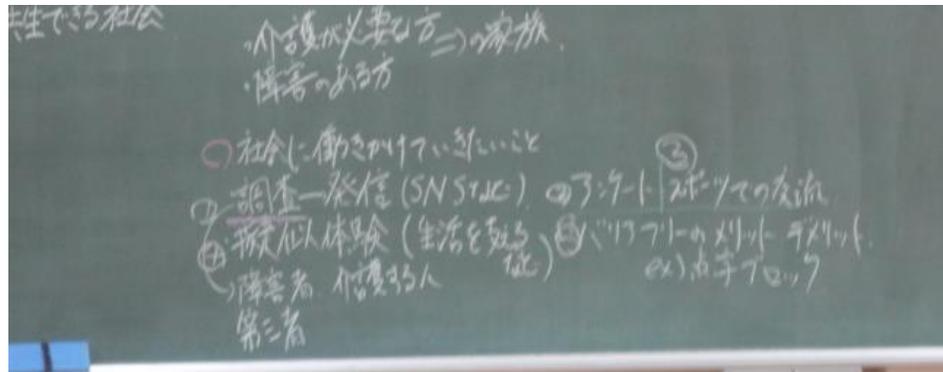
(7) 報告・発表／振り返り【縦交班・自学級・個人】

※年間を通して、各グループにSVに入ってもらい、一緒に考えてもらう。

必要性に応じて、いつでも生徒が相談できるようにする。

1年男 1年女	2年男 2年女	3年男 3年女	1年男 1年女	2年男 2年女	3年男 3年女	担当教師 縦割り交流班(24～30名構成)
1年男 1年女	2年男 2年女	3年男 3年女	1年男 1年女	2年男 2年女	3年男 3年女	
1年男 1年女	2年男 2年女	3年男 3年女	1年男 1年女	2年男 2年女	3年男 3年女	





グループ長たちの役割

講座は基本的に生徒が進める

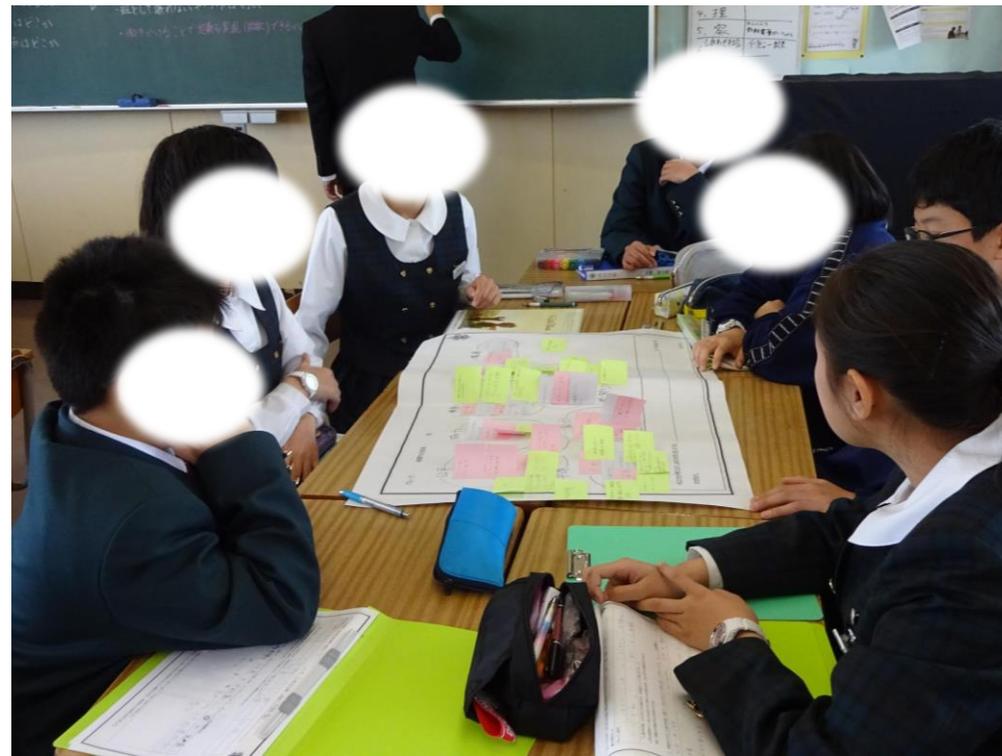
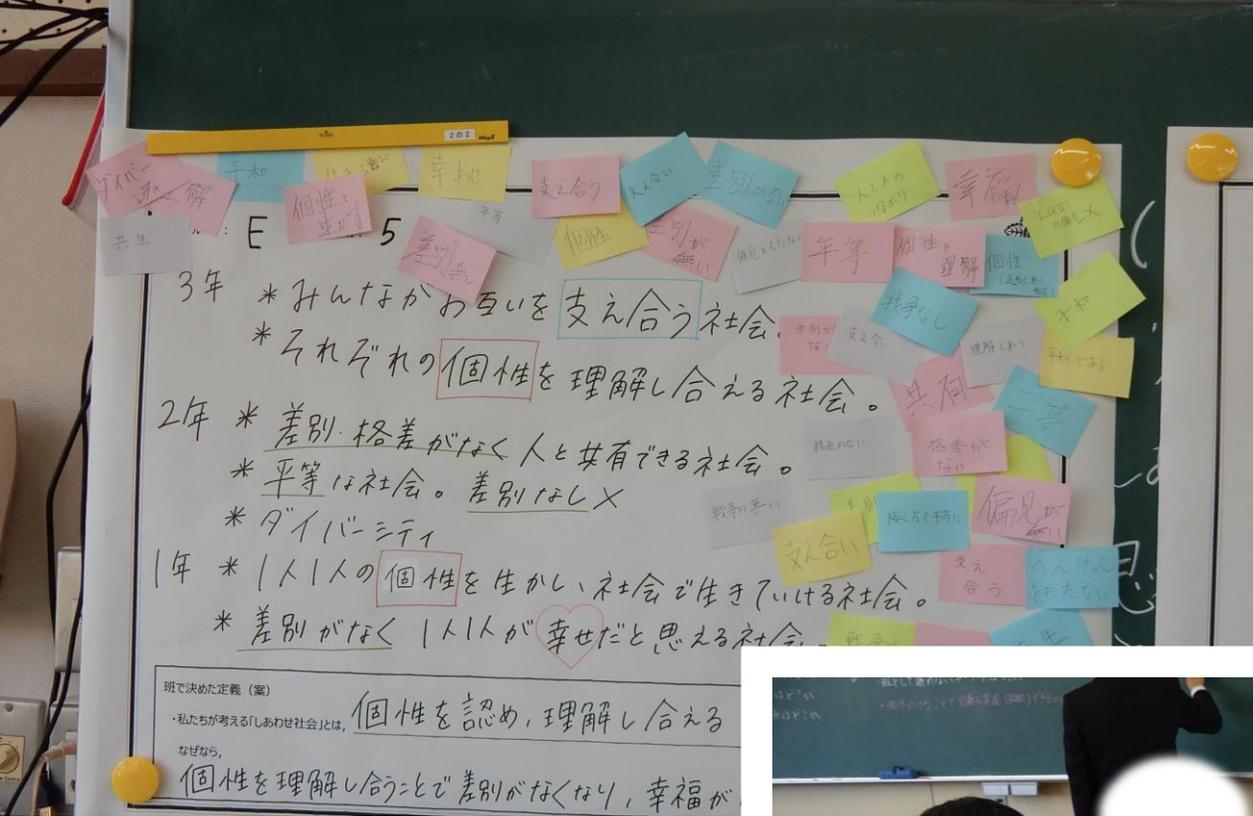
□ 1時間の流れやねらいやゴールを担当の先生と確認しながら進めていく。

□ 板書を行う。

□ 困ったときは先生やSVに助けをもらう。

■ 生徒との確認・期待

○ うまくいかないことがあってもいい。それを生かす、体験を繰り返す(経験へ)。





第1～2時「しあわせ社会」とは？
持続可能な社会に向けた問題提起・ガイダンス

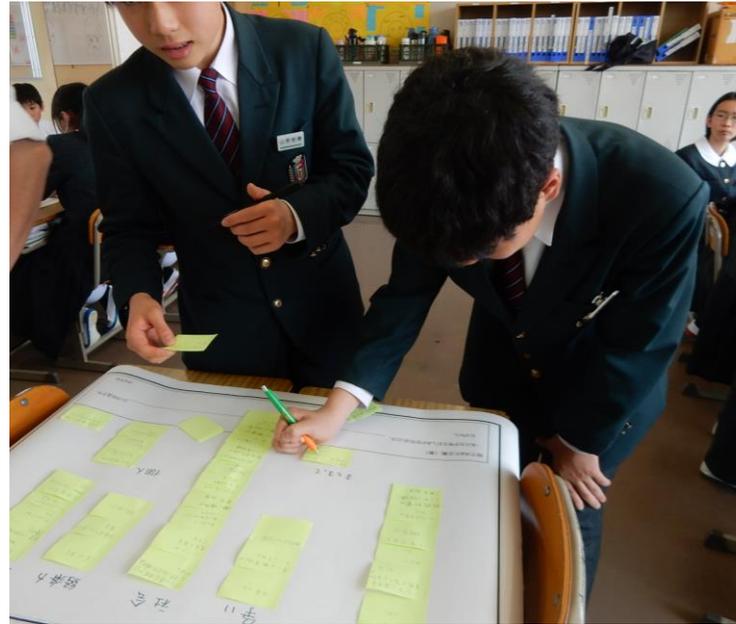
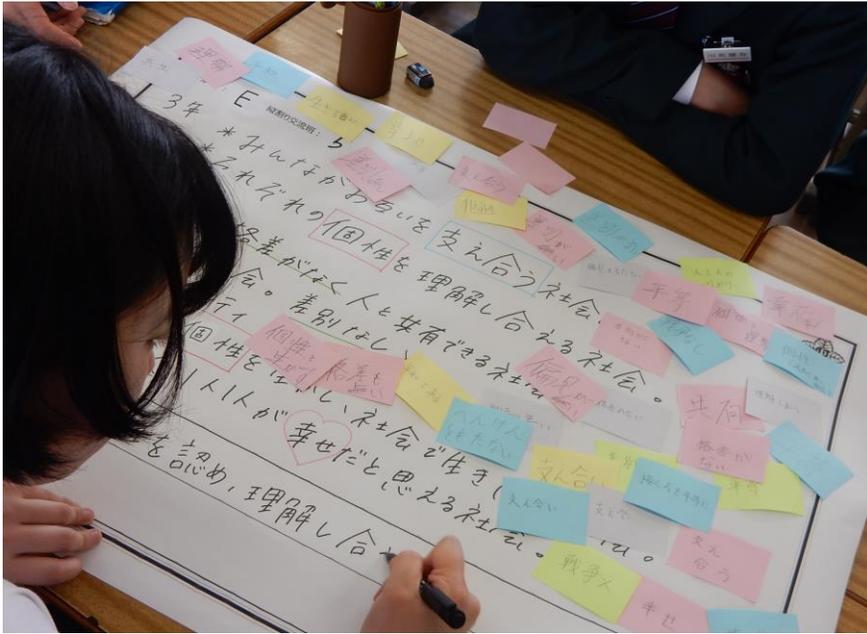




第3～5時「しあわせ社会」の定義付け

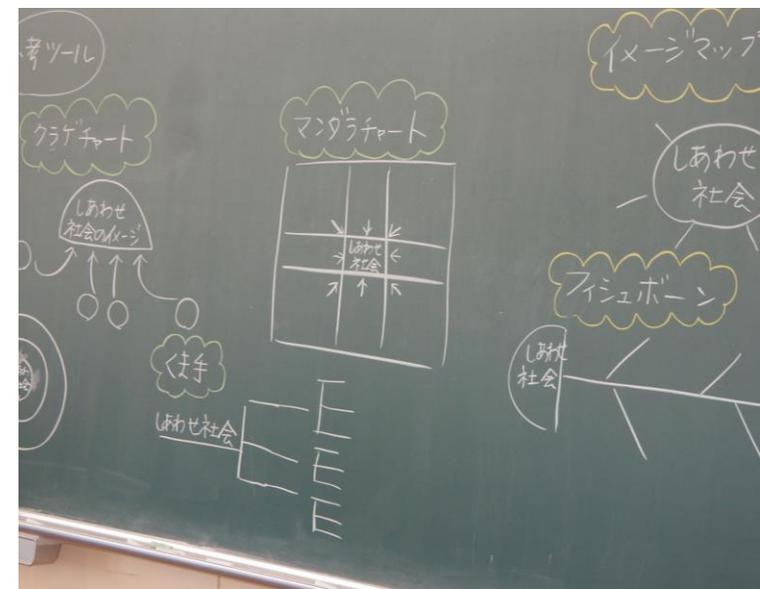
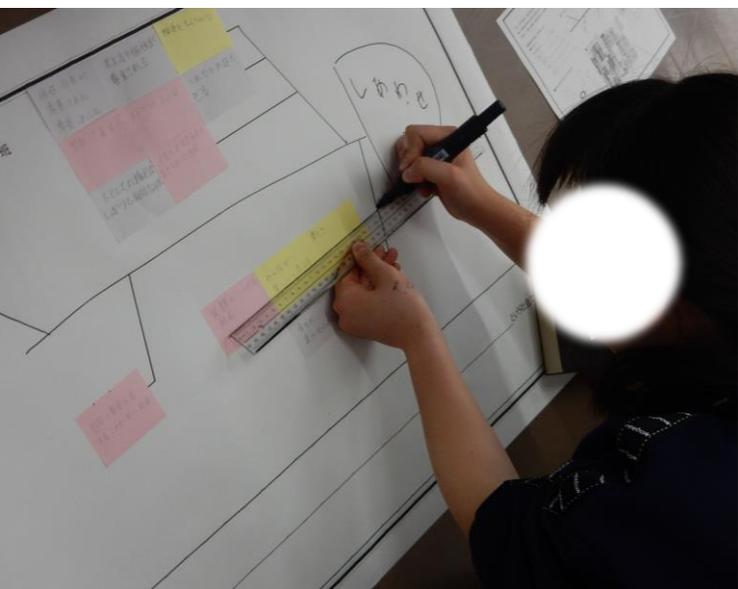
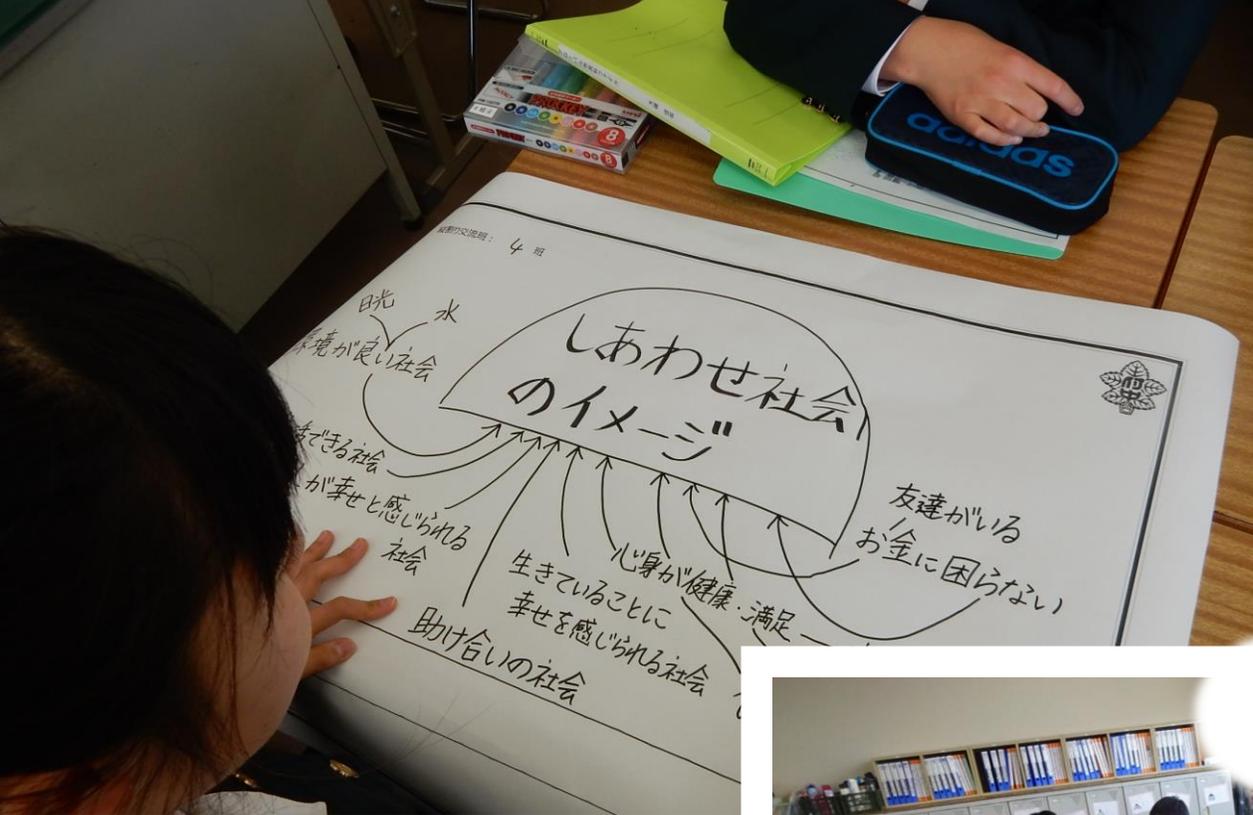
第1時後のフィールドワーク①

- $480人 \times 5(3) = 2400(1440)$ 人
- 「しあわせ社会」への多様な価値観の情報収集
- 大型連休も利用(旅行先でも…/グローバル)
- 対話による焦点化→定義付け



第3～5時
「しあわせ社会」の定義付け

- ・ 思考ツール (KJ, IM), SV活用・対話
- ・ 担当教員の得意分野に任せる





第6時
調査計画の立案
フィールドワーク②



第8時 調査報告・企画づくり

／整理・分析



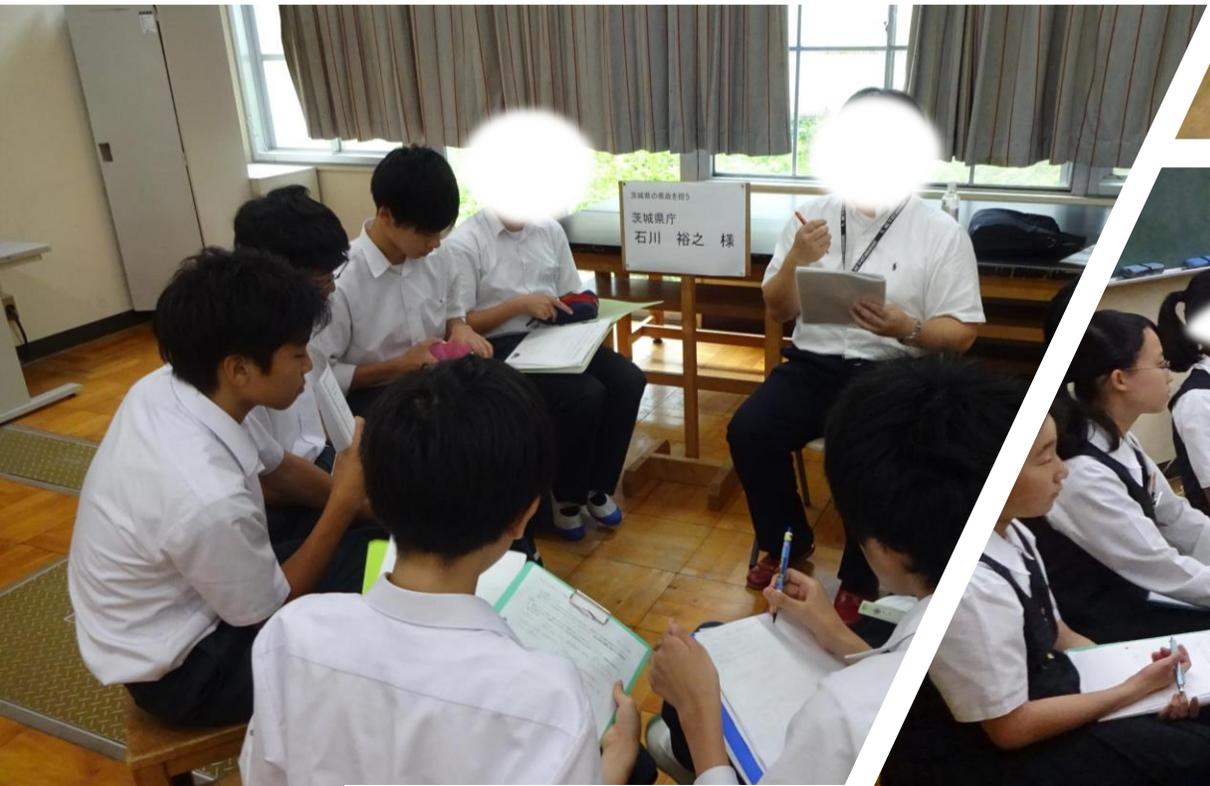


第9～10時 追究調査・企画の提案／SVの活用

	所属	立場・専門分野
1	財務省関東財務局	歳出(支出)
2	水戸税務署	歳入(収入)
3		企業・経営者
4	水戸京成百貨店	商店
5	茨城県	営業戦略部グローバル戦略チーム新市場 開拓担当
6	水戸市役所	政策企画課
7	茨城大学	臨床心理・カウンセリング
8	茨城大学	家庭・ジェンダー
9	茨城大学	ものづくり
10	社会福祉協議会	福祉
11		外国で働いていた人
12～	SVC	主婦, 介護経験者

「“しあわせ社会”をめざして一緒に考えてほしい, 相談にのってほしい」という依頼に集まってくださった方々のところに自由に対話する時間の設定
 →生徒は自分たちの考えを伝え, 不十分なところについて助言をもらう
 実社会は実際(専門的な取組)はどうか教えてもらう





めざす生徒像

より高い価値をめざす生徒

たくましく実践する生徒

ともに向上する生徒

「バブル市民科」しあわせ社会の実現～決めること～
最終発表会
(発表7分+協議10分)

医療で命を救える社会
の実現を目指して

第12～14時 発表・協議 ／働きかけ



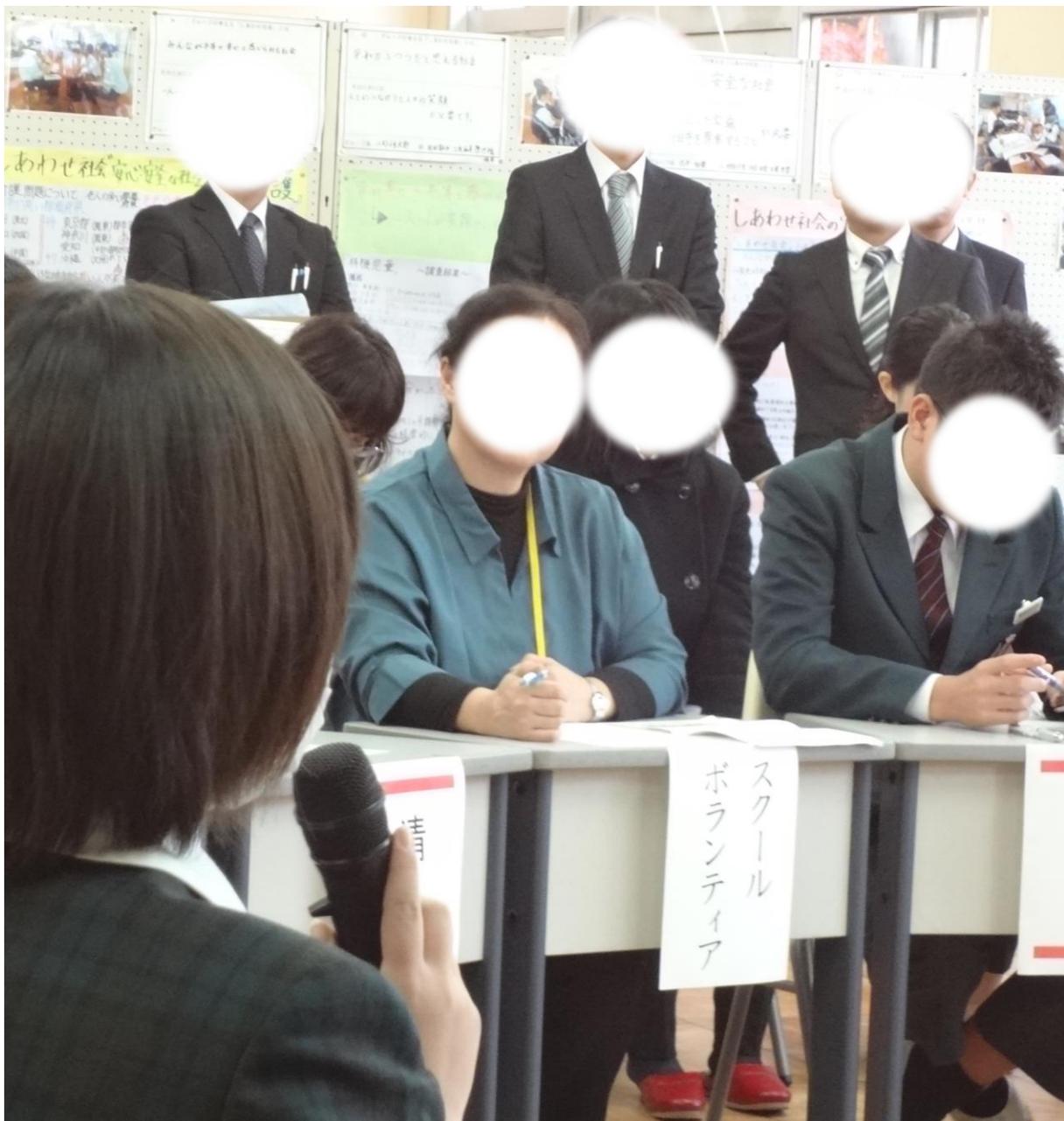
公開授業研究会 (2017. 11. 23)

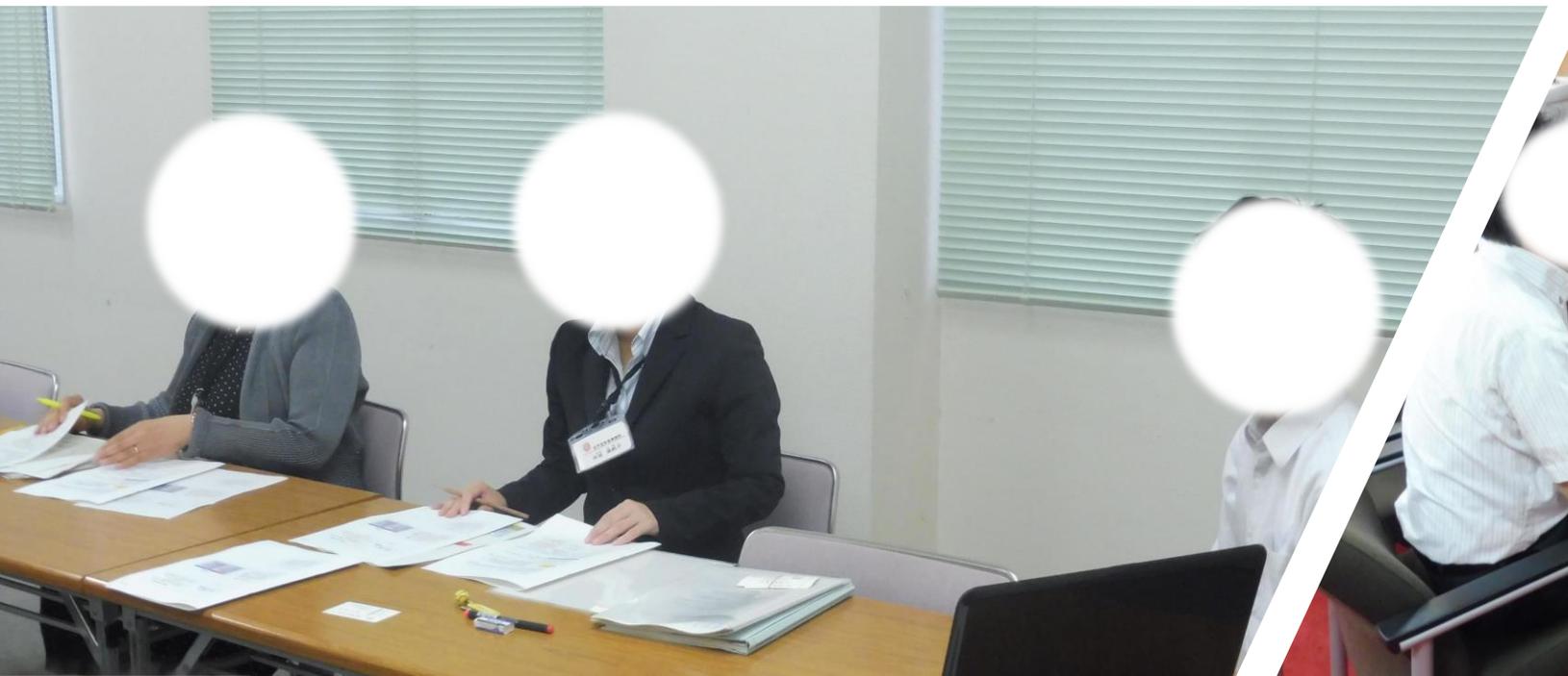




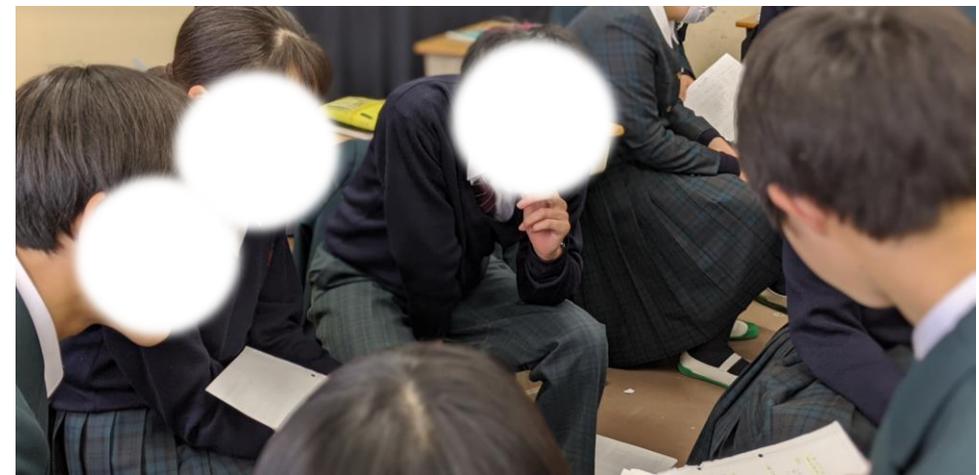
公開授業研究会（2017.11.23）

- ・ 代表グループが成果と課題を発表
- ・ 「しあわせ社会の実現」に向けてSVの方と一緒に協議
- ・ 「しあわせ社会を実現させるために必要なことは何か」， 「自分はどうあるべきか」









6 研究の結果と考察

■ 講座後の振り返りを検証材料

■ 学年ごとに分析(今回は主なものを紹介)

■ 定義付けた持続可能な社会を創る資質・能力が培われたと検証できる記述部分に、アンダーライン(筆者)

私は、「しあわせ社会」の講座で、自由と平和が共にある社会に少しでも近付けるために、いじめについて意識をもってもらうように働きかけをした。そして、現状について知り、先生の話の聞いたり、小学校での対策や意識について調査したりすることで、自分自身も意識をもてるようになった。また、結果から、いじめに対して様々な対策や対応の仕方があり、意識が高いことが分かった。また、結果や検証を受けて、新たな問いがうまれた。「学校によって、意識に差があるのではないか」ということや、「学校によって、いじめの対策や対応のちがいがあのではないか」などである。様々な視点から考えていくことで、自由と平和が共にある社会に近付いていくことができると思った。また、「しあわせ社会」の実現のためには、いじめや不平等をなくしていくことで、平和で「しあわせな社会」へと変えていくことが必要だと考えた。

今回の学びを通して、これからもいじめだけでなくインターネットへの意識や気を付けなければいけないことなど、日常生活で生かしていけるようにしたいと考えた。さらに、自分にできることをやっていくことで少しずつ社会を変えていけるように努力していきたい。最初は何も分からずにはじまった「しあわせ社会」の活動でしたが、様々な活動を通して様々なことを学び、理解していくことができたと思う。これからも、学んだことを生かしていけるようにしたい。私たちが「しあわせ社会」、よりよい社会を創るための手助けができることが、良い学びになったと思う。「社会を創る」ことに貢献することができたと思う。そして「社会を創る」ことは、大事なことだと分かった。

私は今回の活動を通して、様々なことを学ぶことができました。定義について、しっかりと考えました。働きかけをまとめることで、改めて「しあわせ社会」の実現についても考えることができました。今まで、「しあわせ」とはどのようなことか、「しあわせ社会」とは何か、についてあまり考えたことはありませんでしたが、これから、日常生活でも意識しながら「しあわせ社会」の実現をめざしていきたいと思います。今回の学習を生かして、生活していきたいと思ひます。

(1年生/生徒A/講座経験1年)

生徒Aは、身近な地域で起きている偏見と世界で起きている不平等問題を関連させて考え、解決に向けて自分なりの考えを述べている。グローバルな視点で問題を捉え、周りの人や社会と自分との関係を考えながら、よりよい社会創りを尊重していこうとしていることが分かる。

6 研究の結果と考察

■ 講座後の振り返りを検証材料

■ 学年ごとに分析(今回は主なものを紹介)

■ 定義付けた持続可能な社会を創る資質・能力が培われたと検証できる記述部分に、アンダーライン(筆者)

私はこの講座を通して、自分たちが考えていることや思っていることを、大人の人たちに伝えることがどれだけ大切かを実感しました。私たちは、結局、時間内に十分に働きかけることができたとは思いませんが、それで終わりという形にしないで、これからどうしていくのかを考えることが大切なのだと思えます。

人それぞれの「しあわせ社会」の中で、私たちのグループは、「家族」に視点をおいて考えていきました。「家族」という一つの社会は、私たちの軸になっているものです。それは私たちにとって不可欠なものであり、社会においても大切なものです。考え深いものがありました。自分たちなりによくまとめられた(学ぶことができた)と思えます。

今年度の講座では、「創ること」ということを目標にしてきました。昨年度は「働きかけること」でしたが、働きかけるだけでなく、その先の「創る」という所までやらなければなりません。私たちが実践した働きかけに対して、対象者の人たちにどのような変化があり、社会的な変化があったのかどうか、自分たちでしっかりと分析し、少しずつ「しあわせ社会」につなげられるようにしていきたいです。また、アンケート調査によって明らかになったことを、さらにみんなに広げていけば実感がわくし、自分たちへのいい刺激にもなると思うので、そういう形でも意識を高められればいいのではないかと思います。今回は、学びの検証を行うことが難しかったけど、これからに生かせるように取り組んでいきたいです。

「しあわせ社会」を形成するためには、小さな集団のしあわせがどんどん広がって行って、みんなの「しあわせ社会」につなげていくのかなあと考えました。よって、私たちが少しでも今の活動を拡散していけば人々の心に届くし、しあわせを無理やり押し付けるのではなく、サポートとして続けていきたいです。「しあわせ社会」の学びを通して、色々な人とふれあうことができたし、考えも交流できて視野を広げて意見が述べられるようになりました。

(2年生/生徒F/講座経験2年)

生徒Fは、人との「関わり」や「つながり」の大切さを実感し、振り返りをまとめている。単に働きかければよいということではなく、自分たちが取り組んだことに責任をもち、周りの人や社会に対してどのような影響や変化を起こすことができたのか、きちんと見極めていこうとしている。また、講座における他者との学び合いの中で、自分の考えを表現し、多様な他者と織りなす社会に主体的に参画・貢献していけるようになった喜びについてもまとめている。

6 研究の結果と考察

- 講座後の振り返りを検証材料
- 学年ごとに分析(今回は主なものを紹介)
- 定義付けた持続可能な社会を創る資質・能力が培われたと検証できる記述部分に、アンダーライン(筆者)

私は自分とは立場が違う人や、立場が上の人のために働きかけることを、はじめは少しためらっていた。自分が共感できる立場ならば貢献できる考えが出るが、自分とは違う立場、そしてまだ経験していないことを改善することは、どのように働きかけたらいいのかが分からなかった。しかしこの講座では、“中学生”という立場だからこそ効果が出て、働いている人とは逆の待っている人の立場から働きかけることはすごく大切なことだと分かった。私たち中学生でもできることはあり、この世の中に貢献することは可能だと実感した。

私は今まで、立場が違うからできない、共感しにくいからよくわからないと思いついて避けていた。でも、真逆の立場だからこそ、相手の心にひびき、また、呼びかける側の人も強い思いをぶつけることができる。これからの世の中は、今よりももっとたくさんのジャンルの人が活躍したり、新たな分野の人が世界を動かしたりするかもしれない。年代も広くなっていくと思う。外国人との交流も活発になるだろう。そんな時代を創り上げていく私たちだからこそ、今回の講座で私が学んだことを生かしていきたい。全然違う趣味だから分からない、何を言っているのか分からない、と思う気持ちも生まれると思うが、実は真逆な者同士がよい組み合わせなのかもしれないという考えを忘れたくない。

しあわせを創ることは簡単ではないし、この3年間で本当に「しあわせ社会」に近付けたかは分からないけど、3年間たくさんの人と考えた時間は、私の未来に何か役に立つような経験だったと思う。たくさんの人と考えた様々なしあわせを、何かは生かせるように今後生活していきたい。(3年生／生徒J／講座経験3年)

生徒Jは3年間の講座を振り返る中で、自分の在り方や生き方について考え方が変わっていったことを実感している。少子高齢化やグローバル化の進行など、多様な価値観が混在する社会の中で、自分の生き方の一つの基軸となるものをつかんだようである。本来であれば、避けて通りたくなるような自分とは異なる立場の人への働きかけを大切にし、逆に異なる他者との関係を「良い組み合わせ」と前向きに捉えながら、よりよい社会を創るために参画・貢献していきたいと述べている。

6 研究の結果と考察

■最終時に参加してくださったSVの方々は、講座「しあわせ社会の実現」をどのように感じたのだろうか。
SVの方々の振り返りを、第三者による評価として示す。

○3年4組の「しあわせ社会」の活動に参加しました。グループごとに、とても仲良く楽しそうでした。私がウロウロするのがかえって邪魔だろうなと思いました。いない方が率直に話せたかなと…。とても活発に意見交換ができていました。計画したようにできなかったことも、ハキハキ言っていたのが素直で良いなと思いました。3年間のまとめなので、ものすごく濃くて楽しかったです。ありがとうございました。

○私自身、納得しながら発表を聞いていました。「しあわせ社会」だけでなく、「わが家庭」でも共通する問題(相手を尊重する、個々の個性を大切にすること)などに対し、子供と同年代の意見が聞けて良かったです。いつもお疲れさまです。ありがとうございました。

○子供たちのプレゼン力が昨年より格段にupしていると実感しました。「しあわせ」についてクラスメイトと語り合う機会は貴重です。お互いにどんな風に考えているのか知ること、互いを理解する第一歩だと思うので、どんな成果があるかないかにかかわらず、とても大きな学びになったと思います。

○3年2組を担当しました。全体にまとまりを感じるクラスでした。話合いに向け、進行していく態度、先生やSV(大人)に対して関わる態度に附属中3年生らしさを感じました。「しあわせ社会」について、3年にわたり、私自身も関わりを通じて考えることが出来、幸せに思います。子供たちが「しあわせ社会」について考える時、まず、人のことを思いやり、立場の弱い人や自分より小さい子、お年寄りに目を向ける優しい子たちであることに、「しあわせ社会」を築いていく希望の光を感じます。ひとつ加えるなら、TV放送の〇〇さん(生徒代表)が話してくれたように、二つめの「自分自身のしあわせも大切にしていきたい(自分も社会の一員なので、自分のことも考える)」のように、自分自身もしあわせにならないと社会全体がしあわせになることはないので、自分自身のことも大切に人と繋がりながら「しあわせ社会」を築いてゆけるよう、これからもいつも考えながら成長していったらいいなと思いました。ありがとうございました。

SVの方々は、生徒と一緒に考える対話役を年間を通して担ってくださった。生徒の中には、不十分なバックデータの中で独自の考えを述べたり、偏った見方や考え方をしたりしていることもあった。そのような状況の中でも、生徒の話に頷き、自分の考えを伝え、一緒に考える役を担ってくださった。SVの方々だからこそ生徒は素直な気持ちで対話することもできたようである。

7 研究のまとめ

■成果①

○実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムの研究に向けて、附中S V制度や大学の協力を得ながら、**学校内外の人的資源を有効に活用し、具現化を図るために生徒の学習支援**を行っていただき、生徒の持続可能な社会を創る資質・能力を培うことができた。

○**学校と社会が一つの目標を共有し、S Vの方々に繰り返し学校に足を運んでいただきながら、継続的に学習プログラムに参加していただき、生徒の学びを支えてもらったり成長を見守っていただいたりする実践を行うことができた。**これらにより、生徒は社会や人と自分との「関わり」や「つながり」を感じながら、今後の**身近な地域や世界の姿と自分の生き方や在り方を関連付けて振り返ることができた。**

○専門的な立場の方にS Vを依頼した際には、受動的に話や説明を聞くのではなく、生徒から「私たちは〇〇のように考えているのですが、☆☆の立場の方からはどのようにお考えですか。」と質問したり、一緒に考えていただいたりするような方法を取った。生徒は繰り返し質問をしたり、納得がいくまで説明を聞いたりすることができた。S Vの方からは、「生徒が生き生きとしていて、こちらが元気をもらえた。」、「生徒は、とてもよく考えていて驚いた。(そういう風に考えるのか…と、)こちらが勉強になった。」などの感想を何度もいただいた。学校を気遣っての感想ということも承知ではあるが、S Vの方々にとっても、「しあわせ社会」について考えるよい機会となった。

7 研究のまとめ

■成果②

○平成30年度は、実社会への働きかけが弱かったという課題が残った。令和元(平成31)年度は、「働きかける対象を明確にするとともに、検証する」ことを改めて確認し、教員も生徒も意識しながら学びと向き合うことができた。しかし、それでも働きかける対象がまとまらなかったり(妥協できなかったり)、十分な働きかけに至らなかったりした縦割り交流班もあった。

そのような状況の生徒においても、実社会や他者との関係性を大切にしながら、今後の自分の生き方や在り方について考えていたり、講座が終了しても働きかけたりしていこうとする意志があることが振り返りで明らかになった。

○生徒がリーダーとして話し合いを進行し、意志決定までもっていける力を身に付けたことで、学びの自立につながるとともに、教師のファシリテーターという役割に対する重要性の認識につながった。また、毎時間のねらいや核となる考え方は教員間で共通理解を図り、到達に向けたアプローチの仕方は、担当教員(縦割り交流班)に一存した。思考ツールの活用、話し合いの進め方、成果物の作成などにおいて各専門教科の特性が生かされており、教員同士で学び合う研修の場にもなった。

○検証は難しいが、平成29年度から今年度までの3年間の実践を通して、生徒の課題解決力が向上したように捉えている。もちろん個人差はあるが、情報収集、情報の整理・分析、表現などにおいて、意欲や活動の質が高まった印象を受けている。教師が本プログラムの進め方に慣れてきたことも要因として考えられる。

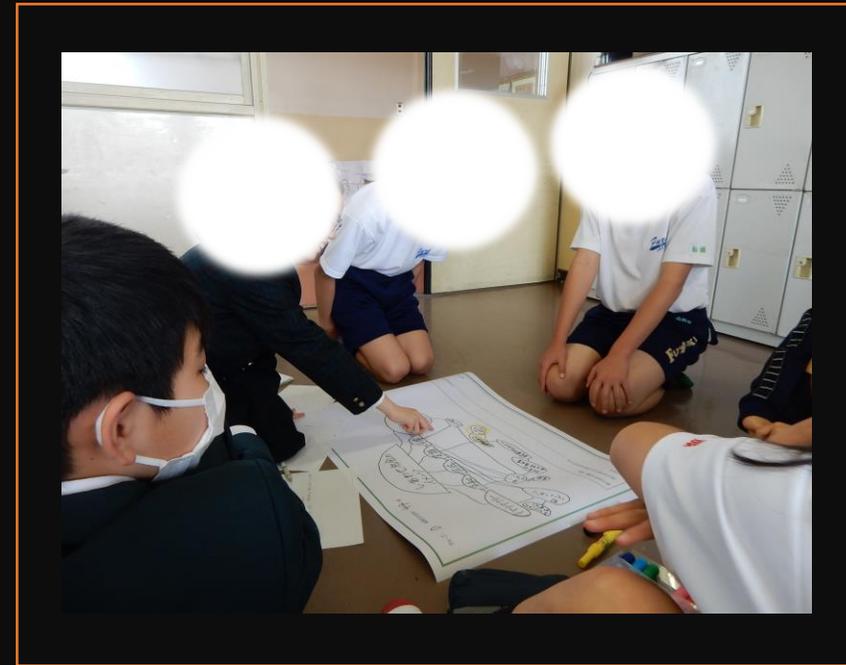
7 研究のまとめ

■ 課題

● 実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムにおける考え方や構想は、総合的な学習の時間(グローバル市民科)のみで取り組むのではなく、各教科等の学習においても実践化を図っていききたい。学校における学びと実社会との接続を実感できるように工夫したり、主体的な態度で実社会に参画・貢献したりできるような生徒を育てていけるようにしたい。

● ねらいや構想に応じた「附中SV制度」や大学の活用を一層図っていくとともに、その効果を検証していききたい。

● 働きかけの方法については、縦割り交流班が主体となって行ったが、一人一人が計画を立て、実践していきかけたという生徒の声もあった。働きかける先方との連絡調整や個別指導における時間的な制約から難しいが、理想的な声でもあった。協働的に学び合うからこそできること、協働的に学び合うからこそ制限されることを見極めて、対応していけるようにしていきたい。



【参考文献】

- 安彦忠彦「“コンピテンシー・ベース”を超える授業づくりー人格形成を見すえた能力育成をめざしてー」図書文化社, 2014年
- 佐伯胖「『学ぶ』ということの意味」1995年, 岩波新書
- 佐藤郡衛, 佐藤裕之「『共に生きる子ども』を育てる国際理解教育」2006年, 教育出版
- 佐藤学/木曾功/多田孝志/諏訪哲郎「持続可能性の教育ー新たなビジョンへー」2015年, 教育出版
- 高木展郎「“これからの時代に求められる資質・能力の育成”とはーアクティブな学びを通してー」2016年, 東洋館出版社
- 多田孝志「グローバル時代の対話型授業の研究ー実践のための12の要件ー」2017年, 東信堂
- 中央教育審議会教育課程部会教育課程企画特別部会, 2015年
- 東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会「カリキュラム・イノベーションー新しい学びの創造へ向けてー」2015年, 東京大学出版会
- 奈須正裕「『資質・能力』と学びのメカニズム」2017年, 東洋館出版社
- J. デューイ, 阿部齊訳「現代政治の基礎ー公衆とその諸問題ー」, 岩波書店, 1969年

ご清聴ありがとうございました

